

活動報告書

報告者氏名： 久貝 元香 所属 沖縄県 うるま市立伊波中学校 記録日 2014年2月28日

【対象児の情報】

- 学 年 中学1年生 女生徒
- 障害名 聴覚障害 難聴（人工内耳）
- 障害と困難の内容
 - ①電話による双方間（保護者）での連絡が上手くできない。
 - ②日常生活において、地域外へ単独移動できない。
 - ③男性の声や放送機器による情報入手が困難。

【活動目的】

- 当初のねらい
 - ①本人と保護者間で携帯情報端末を活用し、メールによる連絡がスムーズに行えるようにする。
 - ②単独で携帯情報端末を活用しながら、公共交通機関（バス）を利用して目的地に移動することができる。
 - ③情報入手の手段方法として、携帯情報端末の活用を行う。
- 実施期間
H25年5月～H26年2月
- 実施者
久貝 元香
- 実施者と対象生徒の関係
久貝（教科担任）

【活動内容と対象生徒の変化】

- 対象生徒の事前の状況
 - ①電話でのやり取りが一方向で、保護者からの伝えたい事が伝わらない。
 - ②地域外への移動は母親の自家用車であり、単独で行動することがない。
 - ③聴覚からの情報入手が場面によって困難で、聞き逃しも多い。
- 活動の具体的な内容
 - ①双方向での連絡ができる
「メール」で、母親・教師とやりとりができる。
 - ②単独で行動ができる
「バスなび沖縄」を活用して、公共交通機関（バス）の利用について学習させることにより、地域外への単独移動が身に着く。
 - ③「自ら情報入手」できる
検索サイトを利用して、学習不足の情報を視覚で入手できる。



○対象生徒の事後の変化

①携帯情報端末の「メール」機能を使うことで、連絡が容易で確実に became.

両親・伯父叔母・教師と送受信しており上手に活用できた。またキャプチャーを教えたところ、バス停確認のために移動した際に「マップ」のGPS機能で位置情報を確認し、画像データとして送信した。



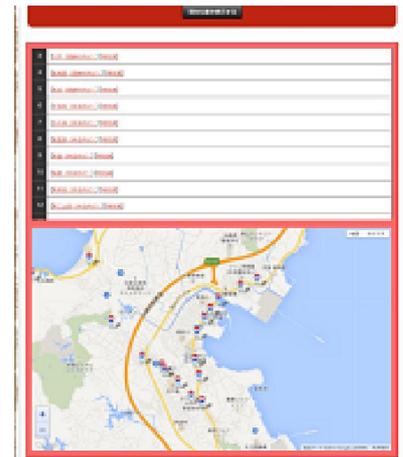
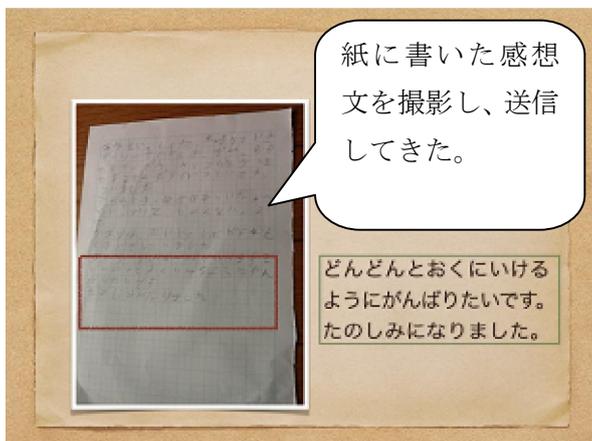
「カメラ」で周辺を撮影し画像を送信する事で、居場所を知ってもらえると理解できたので、単独で行動する際の不安解消に繋がった。



②公共交通機関（バス）乗車体験と路線について理解ができた。

公共交通機関（バス）を利用した事がないので、沖縄県内の地図や「バスなび沖縄」で路線情報や系統等を説明し、バス停の情報を知らせた。翌日には通学路にバス停があることを確認したり、「バス（48番）を見たよ」との報告があり、意識が徐々に高まってきた。そして、夏休みには、地域のバス停の位置確認や乗車体験を実施した。事前に「バスなび沖縄」やWebサイト「バスドットコム」で、乗車方法や料金等の指導を行い実践した。切符を受け取ること、前方の料金表示の見方、下車手前でブザーを押すことを確認しながら、目的地まで移動することができた。

帰路も事前に確認してきた時刻のバスを待って乗車。しかし10分ほど遅れたので心配になったが、落ち着いてバスロケーションシステムを活用できるようになることで、不安を取り除くことができると説明した。実践の感想として、「もっと遠くにいけるようになりたい！」と、前向きな意思表示があった。



③情報入手「検索」について理解できた。

聞くことからの情報は、発信者の状態によりばらつきがあり、正しく正確に伝わっているのか曖昧である。スピーカやラジオ、テレビからの音声について聞こえにくいと意思表示し、テレビは字幕で視聴している。携帯情報端末がいつでも手元にある環境によって、ネット検索で多量の情報から必要な情報を得る事が出来るので、そこから情報量を積み重ねできる指導を行った。

自宅で“難聴でも働ける仕事”というキーワードで検索したようで、母親から「自分自身を理解して、このように検索していたことに驚いた。」との連絡があった。

また、総合的な学習の時間の福祉学習で学んだ語句、先天性と後天性及び視覚・聴覚・肢体についても自宅で調べることができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

☆携帯情報端末 (iPad) を身近な物とした事で・・・

⇒聴覚からの情報不足を補う方法を身につけ、知識の向上に役立っている。

⇒日常生活に活用できるアプリ等について、考えるきっかけとなっている。



○気づきに関するエビデンス

情報端末が手元にあることで、機動性（起動）がよく、疑問に思った事をすぐに調べられる環境となり、楽しく検索している様子が保護者から聞きとれ、大きく変わった事は、「入学以前と今では情報量が大きく増えた。」との事でした。自らの調べたい事等、視覚から多くの情報を簡単に得る事ができるようになったことが大きな成果である。

また、自家用車での遠出の際にも、母子でストリートビューを利用して場所の確認や、地図アプリで移動の様子や経路を確認したりするなど、徐々に活用の幅を母子双方で広げる様子も聞き取りできた。

機器に対して苦手意識なく楽しく意欲的に触れる事ができたので、今後の活用について自ら積極的に模索する姿勢も感じられている。

【今後の見通し】

①メールの送受信を通して

⇒単独で動くことへの母子双方にある不安解消から、ネットワークを少しずつ広げることで、同じ障害を持つ同年代とのコミュニケーションや先輩方からのアドバイスを受けることができ、QOL（生活の質）を高めようとする事ができる。

②公共交通機関（バス）で動ける自信によって

⇒進級するにつれ、高校選択の進路学習が増えてくる。その時に単独で動ける自信が身に付いていることで、進路学習へ不安なく積極的に参加ができ、志望校を決定することができる。

③情報入手

⇒本人の聞こえの状態をチェックしながら、情報端末機器と地元企業との連携を図りながら、学習保障及び社会サービスの活用等、合理的配慮の中でどのように活用していけるのかを考えていきたい。

本プロジェクトを通して、携帯情報端末を活用し困難が解消できたという事を実感させることができれば、今後において、自ら携帯情報端末を上手に活用しながらその壁を乗り越えていけると期待できるので、最後に“できた自信”を植え付けたい。そしてこれから、合理的配慮について理解させ、その自信とともに自立へ向けた生活を目指す方向に持っていきたい。